

Artificial S 1

眠りは地平に落ちて地平

麥生田 兵吾 Mugyuda Hyogo

2016年4月15日[金] - 5月1日[日] *月曜休廊

午前11時 - 午後7時 *金曜日は午後8時まで・最終日は午後6時まで

Gallery PARC GRAND MARBLE

KG+

麥生田兵吾(むぎゅうだ・ひょうご/1976年・大阪府生まれ)は、2010年の1月より、自身が毎日撮影した写真をその日のうちにウェブサイト(<http://hyogom.com>)内の「pile of photographys」にアップする試みを、現在まで6年以上に渡って絶え間なく続けています。

麥生田がその主題として掲げる「Artificial S」。Sは“sense=感覚(感性)”などの意で、「Artificial S」とは「人間の手によりつくられた感性」というような意味で、「pile of photographys」はこの感性を探求し、深めるための実験を兼ねた日々の取り組みといえます。麥生田の主題「Artificial S」は現在のところ5章に分類されており、2014年に本ギャラリーで開催した個展「Artificial S 2 Daemon」は、「人の心におさまっている正体を定めないイメージを露にする」、2015年の「Artificial S 3 Someone(Another one) comes from behind. “後ろから誰か(他の)がやってくる”」は、「他者との関係性の中での【私】の在り処とは何? 何処?」をテーマに構成されました。

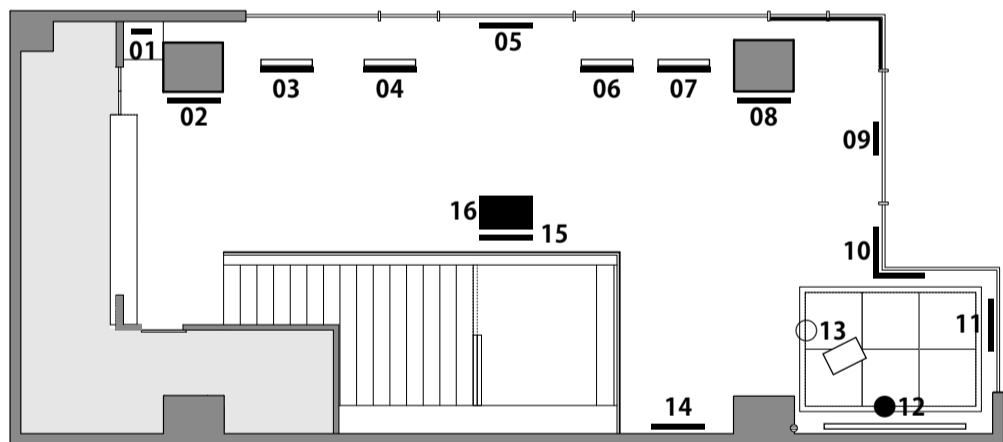
本展「眠りは地平に落ちて地平」はその1章「Artificial S 1」に位置づけられているもので、『今』を“何か”と“何か”の「あいだ」と捉え、それらを「写真」として示し、そこ(鑑賞者の内)に「今」を出現させるものとして取り組まれています。

たとえば生と死。たとえば静と動。これらは個別には記述出来ないが、対となることで記述がはじまる(はじまってしまう)ものですが、ここではそれらを極として、その静止した「境界」を今と指すものではなく、触れているけれど繋がっていない、繋がっていないけれど確かに一つになっているもの、それぞれがダイナミックに混じり合い、激しく震える状態を「今!」と指そうとするものです。

一見して異なるイメージが所謂コラージュの技法により構成されたかのように見える「それ」は、しかしどこまでも「それ」であり、ひとつの支持体を持つ「写真」でしかないものです。過去を参照するためのものでもなく、未来を想像するためのものでもなく、分離した境界を見るのでもない。“何か”が混じり合い続ける「ひとつ」であること(=写真)を示すことで、それを見て驚き、それを想像して驚き、それを体験して驚くこと。それ(今)をそれ(今)として見る、そんな自分自身の目を驚き、楽しんでください。

協力:奥村元洋

*本展はKYOTOGRAPHIE 京都国際写真祭 サテライトイベント「KG+2016」にエントリーしています。



01	sun	2016	インクジェットプリント	42×51cm	非売
02	観葉植物	2016	インクジェットプリント	103×154cm	ed.1/1
03	写真 op.1	2016	インクジェットプリント	83×62cm	ed.20/20
04	写真 op.2	2016	インクジェットプリント	83×62cm	ed.20/20
05	卵	2016	インクジェットプリント	133×103cm	ed.1/1
06	写真 op.3	2016	インクジェットプリント	83×62cm	ed.20/20
07	写真 op.4	2016	インクジェットプリント	83×62cm	ed.20/20
08	カーテン	2016	インクジェットプリント	103×154cm	ed.1/1
09	sun	2016	インクジェットプリント	51×42cm	非売
10	盲人の遺影	2016	インクジェットプリント、鏡	サイズ可変	非売
11	ベランダの女	2016	インクジェットプリント	143×97cm	ed.1/1
●12	sun	2016	オフセットプリント	A4・20p	¥1,500
○13	参考展示(ルネ・マグリット展カタログより 《傑作あるいは地平線の神秘》)				
14	白髪	2016	インクジェットプリント	154×103cm	ed.1/1
15	懐妊	2016	インクジェットプリント、時計	103×154cm	ed.1/1
16	本	2016	インクジェットプリント、時計	133×103cm	ed.1/1

●12 展示されているbook『sun』は1,500円(税込み)で販売しております。購入希望の方はスタッフまでお声がけ下さい。

麥生田 兵吾 | Mugyuda Hyogo

「Artificial S 1」 “眠りは地平に落ちて地平”

私は知っている。

誰かがわざわざ言うまでもなく世界は在るということ。朝起きて目覚めれば世界は在って、家から外へ出ても世界は在る。突然雨が降ってきたからといって世界は揺るぎはしない。いたるところに世界はある。私の世界。私たちの世界。いたるところ---

と、つい口から出てしまったけれど、そのとおりで世界はひとつではなく複数ある。世界はひとつではない、これは「私」がひとつでない可能性をも暗示している。

どうしたってある世界は、人の気持ちの良し悪しといったような感性的経験によって世界はその存在を強く成長させるよう。

経験は未来へ先立たないので、世界は過去へと向かって建築物のよう組み上げられているはずだ。私たちの世界が遠い過去のどこかからの地点にそびえ立つ構造物だとして、それが巨大に成長しすぎていけば、近さや遠さを錯覚することもあるだろう。遠すぎて感受・解像できずに細部を失いひとつの「世界」という単一な様子に化けてしまうこともあるだろう。

感受・解像する感性は外部にたいして開かれているが、感性も経験によって養われているのだから経験されたことのないものに対して本質的に鈍感なはずだ。

私はこの鈍感さとのつきあいかたにいつも苦労する。鈍感さは何かを感じると、それを“何か”にする。鈍感さに照らされるまで、“何か”と“何か以外”はひとつにとけあった状態だった。

感受するということは物事を照らすことに似ていて、感受するということは影(照らされていないところ)をつくることでもある。

鈍感さは、照らした部分を何かと判別するわけではない、照らされなかったところを自覚することもしない。

もしも私にその時々にも勇気を持つことができ、“何か”を“何か”のままに、“自覚できないもの”を“自覚できないもの”としてまんま受け入れることができたとしたら、私はようやく“今”という地点を足元に確認することができるだろう。

躍動の中に私をおいておける。命、それ自体になれる。

生きている。

“今”へ至るまで回り道したけれど、とうとう眼前の世界に対して「あれは何だ?」と問う“ことができる”。今降っている雨で考えよう。

“今”にいる私は世界=過去を問う。この問いがそのまま過去に向かっているなら答えは当然過去にあるだろう。「知っている。これは雨だ。」

欲望・期待されるような答えはおよそ全部が過去に属している。

だけでもこの問いに答えを見つけられないのなら、答えのある場所は過去ではなく今から先の未来にある。「何だろう、わからない」(この時、世界=過去は世界=未来に反転してるやん)

雨を知らなければ、知るためには濡れなければならない。濡れるという経験が、問いそのものであり、“経験=問い”そのものが「雨!」になる。

問うということは未来に暗闇に足を踏み出すこと。

暗闇に足を踏み入れているということは生きているということ。

脳裏に突然現れた暗闇の先に浮かぶ太陽。

まだ進んでいける。

しかし、まあなんだか疲れる。

世界は広すぎるし多すぎる。世界にたいしてどれほど問えることができるというのか。へとへとになったので気晴らしに想像してみよう。

今、降ってきたこの雨が、私のはじめての雨なんだと。

はじめての雨? すごいね。おどろく。

何だこれ? ってなる。

ただの想像なのに楽しい。

あれ? でも雨ってこんなやっつけたっけ?

想像からぬけた私は動揺する。

知ってる雨が本当にはじめての雨になった。

この雨は春の雨で、花を散らす重い雨で、新芽を芽吹かせる温かい雨。初めて経験する雨だった。

おもしろい。

そうか、驚くんでいいのか。

想像して驚き、そして経験して驚く。

そうすればよい。

※

曖昧になってたらいけないので最後にはっきりさせないといけない。世界をどうこうしているその主語は「私」「私たち」です。「私」は「麥生田」。なら「私たち」は「麥生田たち」?なんかちゃう。「私」たちのうちにある「私」は「私」とはいつも一致するわけではなさそうですね。

おわり

麥生田 兵吾

<http://hyogom.com>

1976 大阪に生まれる

2010 「pile of photographys」をweb上で発表開始(現在継続中)

「THE TOKYO ART BOOK FAIR 2010」(3331千代田ARTS / 秋葉原):「Zine port」の一員としてZineを出品

2011 「THE TOKYO ART BOOK FAIR 2011」(3331千代田ARTS / 秋葉原):「Zine port」の一員としてZineを出品

グループ展「in the waitingroom」(waitingroom / 恵比寿)

2013 グループ展「溶ける魚 つづきの現実」(京都精華大学ギャラリーフール / Gallery PARC)

2014 個展「Artificial S 2 -Daemon-」(Gallery PARC)

グループ展 「2014 FOIL AWARD in KYOTO」(FOIL GALLERY / 京都)

キャンノン写真新世紀2014 佳作受賞 清水穰選

2015 個展「Artificial S 3 -Someone (Another one) comes from behind. “後ろから誰か(他の)がやってくる”」(Gallery PARC)

2014 雑誌「FOIL vol.4(2014) FOIL AWARD in KYOTO」に作品掲載